







学位論文審査の結果及び最終試験の結果の要旨

学位申請者氏名	中根 隆		
学位論文名	下顎骨偏位を伴う骨格性下顎前突者の外科的矯正治療前後のスマイル時の口唇、頬部の軟組織運動 Lip and cheek movements during smiling in patients with mandibular protrusion and mandibular deviation before and after orthognathic surgery		
論文審査委員	主査：	松本歯科大学 教授	大須賀直人 
	副査：	松本歯科大学 教授	岡藤範正 
	副査：	松本歯科大学 講師	横井由紀子 
	副査：		
	副査：		
	副査：		
最終試験	実施年月日	2020 年 9 月 14 日	
	試験方法	口答 ・ 筆答	
学位論文の要旨			
<p>本研究では偏位を伴う骨格性下顎前突者の外科的矯正治療後のスマイル時口唇と頬部の動きを垂直、水平、前後の三次元的変化を詳細に検討することで明らかにした。方法として、偏位を伴う下顎前突者の外科的矯正治療前後のスマイル時の口唇と頬部の動きをステレオカメラで三次元的に解析し、個性正常咬合者と比較した。</p> <p>被験者は、松本歯科大学病院矯正歯科を受診し、外科的矯正治療の適応と診断された偏位を伴う下顎前突を呈する顎変形症患者で保定が1年終了した8名（以下、偏位下前群：平均年齢 21.7±6.6 歳、男性 2 名、女性 6 名）、対象群として個性正常咬合者 8 名（以下、正常群：平均年齢 27.0±1.7 歳、平均 ANB 3.0±1.2°男性 2 名、女性 6 名）とした。</p> <p>スマイルの計測には Posed smile を用い、上下口唇中央部、左右口角、左右頬部の軟組織の安静時からスマイル時への三次元の移動様相についてステレオ写真を用いて評価した。また、側面、ならびに正面頭部エックス線規格写真を計測して外科的矯正治療前後の形態変化についても解析した。</p>			
学位論文審査結果の要旨			
<p>研究結果より、治療後の偏位下前群の口唇では、非偏位側口角の外方移動量の増加と偏位側口角の垂直移動量の増加により、偏位側と非偏位側口角の三方向の非対称性は改善し、左右対称なスマイルを示した。偏位側と非偏位側の口角部の水平方向と垂直方向の口角の移動量は増加した。頬部では、治療前後ともに偏位側と非偏位側で非対称例はみられず、治療前は正常群との差はみられなかったが、治療後、非偏位側頬部の前方移動量が有意に増加し、偏位側頬部も有意差は無いが増加した。正常群と偏位下前群の治療前後の比較では、治療前の非偏位側口角水平距離と偏位側口角前後距離が有意に小さい値を示した。治療後は、非偏位側口角水平距離は増加して、正常群との差は無くなったが、偏位側と非偏位側の口角前後距離については、ともに有意に小さい値を示した。下唇中央部前後距離も治療後、正常群に比べ有意に小さい値を示すことが確認できた。</p> <p>また、今後も研究を遂行することから新たな知見も期待でき、研究方法、得られた結果から導いた考察とその結論は適切かつ明確であることから、本審査会は本論文が博士（歯学）の学位論文に値すると判断した。</p>			

(様式第 13 号)

最終試験結果の要旨

下顎骨偏位を伴う骨格性下顎前突者の外科的矯正治療前後のスマイル時の口唇、頬部の軟組織運動に関する内容で下記の質問を行った。

1. 本研究の結果から外科矯正の選択基準に変更があるか。
2. 統計解析について
3. 軟組織運動を評価した理由な何か。
4. スマイルについて指導方法はあるか。
5. ステレオカメラの撮影構成は妥当か。
6. 被験者の分類方法について。

質問について文献的考察もふまえた確かな回答があり、申請者は博士課程終了者としての見識を有していると判断した。

以上により申請者は博士（歯学）として十分な学力と見識を有するものと認め、最終試験を合格と判定した。

判定結果

合格

・ 不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を（ ）を付して記入すること。
- 2 学位論文名が日本語で表示されている場合には、英語訳を（ ）を付して記入すること。
- 3 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。